

クローズアップ

原発30キロ圏内 5万5000人

福井

原発事故時に避難する際、甲状腺被ばくを防ぐために必要な安定ヨウ素剤。ところが、原発立地が集中している福井県では、原発から5〜30キロ圏の住民に事前配布されず、避難の際に有効に使われない危険性が浮上しています。
(福井県・山内巧)

福井県の原子力防災計画や広域避難計画要綱に基づいて、原発から30キロ圏の住民が初めて参加する圏外避難訓練が8月31日に実施されました。

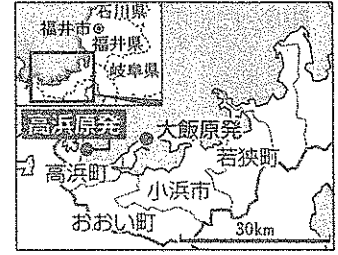
関西電力高浜原発の過酷事故を想定した訓練で、30キロ圏内には高浜、おおい、小浜3市町全域と若狭町の一部の計5万5000人が住んでおり、県外も含めると計12万8000人になります。

遅すぎると

当日の訓練は、3号機の冷却機能喪失による炉心損傷で放射性物質が大気中に放出される想定で、まず5キロ圏の災害時要配慮者と住民が避難しました。

5〜30キロ圏では、大気中の放射線量が実測値で1時間当たり20マイクロシーベルト以上(1週間程度内に避難)や同500マイクロシーベルト以上(即時避難)の基準を超えた

住民へヨウ素剤 早く



地域の住民から避難する要領です。

午前10時、5キロ圏外の高浜町和田地区に有線告知放送で避難指示がなされました。「ただちに自家用車に乗り合わせ、保健福祉センターで安定ヨウ素剤を受け取り、避難してください」。放射線



避難バスのスクリーニング訓練 8月31日、福井県おおい町

量が基準を超えて観測されたとする時刻から40分後です。
ここから住民は自家用車やバスなどで避難し、途中、町保健福祉センターに寄って、安定ヨウ素剤を受け取りました。放射線ヨウ素が飛来してから、安定ヨウ素剤が配布されているのです。

24時間前

日本医師会の「原子力災害における安定ヨウ素剤服用ガイドライン」によれば、放射性ヨウ素に暴露する「24時間前」の服用なら「90%以上の抑

制効果」があり、8時間後では40%、24時間後は7%です。甲状腺を安定ヨウ素剤で満たすことで放射性ヨウ素が取り込まれないようにすることから、暴露前に服用する方が効果は高くなります。光陽生協クリニック院長の平野治和医師は、配布前の問診にも問題があるといいます。新たに配布対象となった40歳以上には、慢性疾患の薬を服用している患者が少なくありません。ガイドラインでは「相互作用に注意が必要な薬剤」としてかなりのリストを挙げています。平野医師は「混乱する中でチェックするのは困難。薬剤師をどう確保するつもりか」と指摘します。

西川一誠福井県知事はようやく、5キロ圏住民への安定ヨウ素剤の事前配布を10月から実施できるよう準備を進める」と表明しましたが、5〜30キロ圏については検討もしていません。

日本共産党の佐藤正雄議員が県議会で、事前配布の必要性を訴えると、山内和芳健康福祉部長は、紛失の恐れを理由に挙げて拒否しました。5キロ圏にもあてはまる理由なのに、全くの外れの答弁をしています。